

【巻頭言】

あなたはキャリアと実践を
省察的に捉える機会を持っていますか？

長谷川明弘

東洋英和女学院大学

東洋英和女学院大学心理相談室紀要

第17巻, 2014, pp1-3

あなたはキャリアと実践を 省察的に捉える機会を持っていますか？

長谷川 明弘

はじめに

東洋英和女学院大学大学院（以下、本学大学院）は、男女を問わない高度専門職業教育をめざす社会人養成型の大学院として1993年に修士課程が、2002年に博士課程が港区の六本木校地にそれぞれ設置されて現在に至っています。

私は「大学」という業界に勤めて10年が過ぎ、2013年4月から東洋英和女学院大学で働き始めました。となると本学大学院の設立20年目に着任したことになります。前職では、学生相談カウンセラーを兼任していましたが現職では、教員としての教育と研究そして学内の各種委員会の役割を担うことに業務が絞られました。新しく加わったのは、大学院で指導学生を受け持ったことです。兼業届を提出して学外の心療内科クリニックにて臨床活動を継続していますが今回の移籍は、私が大学院修士課程を修了した20年近く前から臨床現場に身を置きながらキャリア（career）を積み重ねてきた中での大転換でした。

冒頭で述べましたが本大学院には社会人として働いた経験をもった学生を対象にしていますが、大学を卒業してから進学した学生もかなりの割合で在籍しています。臨床心理学領域に限定しても、臨床心理学の専門職をめざして、自らのキャリアを考えて進学を決意している事変わりありません。しかしキャリアを考えるのは受験の時だけではなく、生涯を通じて考えていくものです。キャリアは職歴や経歴からみた人生の歩み・生涯のことを指しており、このキャリアを深く考えることは、人生を豊かにすることに繋がっていくでしょう。私自身、転機毎にキャリアを振り返った上で、未来を見据えた決断をして今に至っています。皆さんは、時々立ち止まっていますか。クライエン

トの幸せを願うこと、そして役立つ実践をしようとしていることと同じくらいに自らのことを大切に考えていますか。

本論ではキャリアや省察（reflection）について話題を提供します。

キャリア・アンカー

Schein (1990) は、キャリア・アンカー（Career Anchors）という概念を提唱しています。アンカーとは、船の錨（いかり）のことです。キャリアを積み重ねる中で自己概念が形成され、自らの能力・適性、動機、価値観を理解していくのに10年かそれ以上の仕事経験が必要としています。仕事を通じた適切で意味あるフィードバックを受けていれば自己概念の形成が早まるといいます。この自己概念の一要素であるキャリア・アンカーがキャリアを選択する指針や方向付けの機能を果たしているとScheinは考えました。キャリア・アンカーは、キャリアという長い航海の中でアンカー（錨）を下ろして航路や停泊先から流されない機能を果たしていることをたとえた命名でしょう。キャリア・アンカーは、専門・職能別コンピタンス（Technical/Functional Competence）、全般管理コンピタンス（General Managerial Copmpetence）、自律・独立（Autonomy/Independence）、保障・安定（Security/Stability）、起業家的創造性（Entrepreneurial Creativity）、奉仕・社会貢献（Service/Dedication to a Cause）、純粋な挑戦（Pure Challenge）、生活様式（Lifestyle）といった8つの種類があることが分かっています。キャリア・アンカーを知る事は、自分がどんな働き方をしたときに幸せを感じるかを知る手がかりとなります。私は、自身のキャリア・アンカーを把握

して、キャリアの転機の指針として活用していました。着任一年目を振り返って今回の選択は適切であったと判断しています。皆さんは、臨床心理学の専門職として、働く場所をどのように決めてきたのでしょうか、またどのように決めていくのでしょうか。キャリア・アンカーは、そのヒントを与えてくれます。

省察的实践者

Schön (1983) によれば、技術的合理性 (Technical Rationality) という認識の仕方がプロフェッショナル (専門職) をプロフェッショナルたらしめてきましたが、様々な職業が専門職化して行く中で、問題解決に際して、これまでの技術や知識で導き出される結果が合理的に予測できない案件に遭遇するといった「不確かな状況」に出くわすようになっていったといえます。つまり技術的に厳密な方法や知識で問題解決をするよりも適切な実践方法で解決を試みるのが求められるようになっていきました。その適切な実践方法を試みる中で生じるのが行為の中の省察 (reflection-in-action) です。行為の中の省察とは、行為について考え、時に驚き、これを機に行為者が振り返って、暗黙知になっていた行為の中の事柄に自問自答することを指します。これをプロフェッショナルが実践の中 (in) で行ったり、実践について (on) 省察を行ったりしているそうです (Schön, 1983)。省察的实践者 (Reflective Practitioner) とは、目前の実践対象、例えば臨床心理学領域に当てはめるならば、クライアントの訴えに対して、それを「固有の状況」として捉え、新しい発見を試みて状況に適合したやり方を創出していくことです。省察的实践者は、決して標準化された一般的な状況のように捉えていないといえます。目前の状況に対する実践方法を工夫する中で、様々なアプローチの根底にある基本構造に沿った対応を取ります。実践者が自らの行為と目前の状況との間を行き来する省察があつて対応を可能としています。本論で紹介した省察的实践者は、対人援助職を能力やサービス提供の姿勢の違いによる

成長段階として分類した3タイプ (長谷川, 2011) の中の「創造者 (creator)」とかなりの点で類似しています。

大学院で学ぶ学生もプロフェッショナルの実践と同様に大学院での新しい学びという「不確かな状況」に遭遇して、これまでのやり方や考え方を変えざるを得ない時に出会っているかもしれません。特に臨床心理学の周辺領域 (教育、福祉、保育、看護など対人支援専門職) から臨床心理学の専門職をめざして入学を決意した場合や社会人としての経験がある程度ある場合には、これまでの自分のやり方を脇に置いて、大学院でゼロから学ぶ姿勢を持たないと実践者として活動をしてみて伸び悩むことが生じるでしょう。しかし、これまでの経験を無視してゼロにしるいう意味ではありません。経験と照合する一方で、新しい場面に合わせて自らのやり方を「調節」して欲しいです。また何のためにキャリアを変えようとしたのかを自問自答して欲しいです。

おわりに

キャリア・アンカーは、長いキャリアを歩む中で自分の価値観を立ち止まって振り返る機会です。省察的实践者が行っている「行為の中の省察」は、実践の中で立ち止まって自らの行為を見つめる機会です。心理職の国家資格化が強く望まれています。心理職をキャリアとして位置づけていく上で、今実際に臨床心理学の専門職として仕事としている一人としてキャリアと省察について振り返った次第です。

文献

- 長谷川明弘 (2011) 生涯にわたって活躍する対人援助職になるために—臨床心理基礎実習での学びを越えた先にある「何か」—, *Hearty* (金沢工業大学心理科学研究所年報・金沢工業大学臨床心理センター報), 第7号, pp76-79.
- Schein, E.H. (1990) *Career Anchors: Discovering Your Real Values* (Revised Edition), Jossey-Bass/Pfeiffer
- 〈金井壽宏・訳 (2003) キャリア・アンカー—自分

の本当の価値を発見しようー 白桃書房>

Schön, D.A. (1983) *The Reflective Practitioner-How Professionals Think in Action*, Basic Books <柳沢昌一・三輪建二 監訳 (2007) 省察的实践とは何かープロフェッショナルの行為と思考ー, 鳳書房>